

おわりに

平成 24 年夏のロンドン・オリンピックでは金メダル 7 つを含む 38 個と史上最多のメダルを獲得した。応援への感謝を表そうと日本オリンピック委員会が企画した東京・銀座の凱旋パレードの沿道には約 50 万人が集まった（平成 24 年 8 月 20 日）。引き続き開催されたパラリンピックもまた多くの人びとに興奮と感激をあたえてくれた。ふたつの大会がともに、琴線を揺する理由は選手たちの、そして彼らを支える関係者の、ひたむきさにある。とりわけ、パラリンピック選手たちは競技そのものだけでなく障害を乗り越える。ゆえに、オリンピック以上の努力と忍耐が感じ取れる。メダルや順位はひたむきさを生み出すツールに過ぎないと教えてくれる。メダル獲得が目的ならば、パラリンピックのメダル 16 個はオリンピックの半数以下で、興奮と感激は半減する。そんな物言いは間違いなく興覚めとなろう。だからこそ、石原都知事が日本オリンピック委員会に凱旋パレード開催を示唆したように、日本パラリンピック委員会もまた橋下・大阪市長と諮って凱旋パレードを大阪・御堂筋で開催して欲しかった。大阪は障害者スポーツの本拠地なのだから。

このような夢物語を描く理由は、未だパラリンピックがオリンピックと比肩できる状況に達していないからに他ならない。折しも内閣府「障害者に関する世論調査」（平成 24 年 7 月調査）が 9 月 24 日に発表され、障害者への差別や偏見があると答えた人が平成 19 年調査と比較して 6.3 ポイント上昇し、89.2%に上ったという。

幸い、先の夢は仙台で実現した。震災復興支援のため、日本オリンピック委員会と日本障害者スポーツ協会が企画したパレードが平成 24 年 12 月 2 日に JR 仙台駅前近くの大通りで開催され、オリンピックとパラリンピアンがゆっくりと歩をすすめ沿道の人々と笑顔でハイタッチを交わした。

さて、プロアマの境界線が消滅しアマチュアリズムも死語となった。福利厚生に始まり広告塔を経た企業スポーツは休部・廃部に瀕する。そのような状況下、改めて、わが国のトップアスリートを支えてきたのが大学スポーツであると確認できる。戦前から戦後を通じて、強固な基盤を連綿と提供し続ける大学がその社会資本となるスポーツ環境を障害者スポーツ選手に門戸開放しているのか否か。そんな基本的な問いかけを今回の調査で投げ掛けた。体育学、スポーツ科学、健康科学の専門学部、課程、学科、コース等を有する大学・学部 167 校からの回答は 51 件、30.5%にとどまった。オリンピックとパラリンピックがセットで論議されるグローバル・スタンダードにあって、この回収率をいかに解釈するか。障害者に向ける世間の視線と同じく障害者スポーツ選手へのそれも冷たいのだろうか。体育やスポーツにおけるインクルージョン推進・実現に向けて、本調査が戦端を切る。